天界の玩具
乳牛天使

これは、冥界の乳牛奴隷天使が
まだ天界で恋人の天使と暮らしていた頃のお話。
『あぁ…ッ、やだ…こんな格好…
縛ったりしなくても…私はあなたから逃げたりなんてしないのに…』
「なあに、雰囲気作りだよ。たまにはこういうプレイもいいだろう？」

『恥ずかしい…から…もっと、普通に…あっひぃんッ』
『くく、ニプレスを剥がしただけでなんだこのミルクは？』
「はぁ…あ…」
『ココも…ぬるぬるに
涎を垂らしてるぞ？こんなにされて悦んでるのはお前じゃないか』
「あはぁ…あ…違…ソコ…拡げ…ないでぇ…あんっ…」

『ココはイヤだって？だったら、アナルから可愛がってあげようか。
しっかり集中できるように、目も塞いでしまおう』
「やッ…あ…ぁ」
『どんどん飲み込んでるぞ？貪欲なカラダになってきたなあ、いい子だ』
「あ…くぅ…ンッ…だって…あなた、の、したい…ことなら…ぁんっ、わたしは…
なんでも…ひっ、受け入れ…ます…から…あひぃあっ」

「そうだな。…お前の望みは何だ？」
「わたしの…んひっ、望みは…あなたの、望みを…叶えること……あはぁんッ」
「いいお返事だ」
「んむぅ…!?」
「じゃあ早速叶えてもらおうか。今日は、自由を奪われ、何も抵抗できない雌牛…いや、性人形として、私の精を存分に受け止めてもらうよ」
「んん、んうぅ…う…！ふぁう、う、んんん――♡」

「ふふ、アナルパールがナカでごりごりって当たって…気持ちいいよ」
「んふぅ、ふぁう…！んもっ、おッ♡んくぅ…ううッ♡」
「こうされた方が積極的になれるようだな？あられもなくいやらしい声をあげて、ぶるんぶるん乳を揺らして。それじゃ、まず一回目。めいっぱい注いであげるからな」
「んあひぃいっ、おッん…！んむッ、んおひぃいんッ……♡♡♡」

「ふぅ…。 両穴ともすっかり私のカタチになったな。 最後の方はずっとイキッぱなしになってたみたいじゃないか。 ぎゅうぎゅう無遠慮に締め付けてきて…困った奴だ」
「んぅ…ふ…ぅ…」
「お前の望みが私の望みを叶えることなら…その豊満なカラダすべてを私に捧げていつまでも私を愉しませてくれよ。 お前も嬉しいだろう？」
「…んむ…ぅ…ふぁ…いひぃ……♡」